

SI-2 特発性全般てんかんと側頭葉てんかんの 精神症状

京都大学医学部附属病院精神科神経科

扇谷 明

てんかんと精神病が同一のものとして論議されていた今世紀はじめのドイツにおいて、すでに2つのタイプのてんかんが知られ、その精神症状が詳しく論じられていた。そのタイプは現在のてんかん分類では、特発性全般てんかん (IGE) と側頭葉てんかん (TLE) とみなされる。その当時の見解を代表する人として、クレッペリンがいる。彼によるとIGEでは、その精神病状態は興奮とともに一時的な昏迷様状態をみ、その性格特徴は軽率で落ち着きがなく、ときに衝動的行動がみられるが、知能の障害はみない。一方、TLEでは精神病状態として、幻覚妄想をみ、その性格特徴は鈍重で于遠であるとされる。この分類はその後、Janzに引き継がれ、現在のてんかんと症候群分類の基礎となっている。

この流れとは異にして、フランスのDongierは多数例のてんかん患者の精神病状態をまとめ、IGEではconfusionを特徴とするが、TLEでは気分の動揺を伴う情動の障害を特徴とするとした。その後、IGEとTLEの精神病状態を比較した研究は、ほとんどなされていない。今回、われわれは京大病院精神科という特殊な一施設で、IGEとTLEに合併する精神病状態の特徴を調べたので報告する。

対象としたのは、平成3年12月より平成8年6月までの期間に京大病院精神科で治療を行った成人のてんかん患者で、明確なてんかんの診断のつけられた327例であり、その内、IGEと診断されたものは69例で、TLEと診断されたものは105例であった。そのうち精神病エピソードがみられたものは、IGEが14例(20%)、TLEは16例(15%)であった。精神病状態の症状は、IGEでは錯乱状態を呈する急性一過性の精神病で、従来診断での非定型精神病像を呈するものが最も多く、TLEでは幻覚妄想状態で慢性化の経過をとるものが最も多かった。発作頻度では、IGEの頻度が年1回以下のものが多く、TLEでは月1回以上が多かった。このことはIGEでは発作の頻度と関係が乏しく、代表例からは脳波の前頭優位の徐波と精神病状態が関係しているとみなされた。一

方、TLEでは発作の頻度の高く難治なものに精神病状態をみるものが多かった。3例のTLEにおいて側頭葉切除術で、術前に挿入性にみられていた精神病状態が、手術後、発作の消失と脳波異常の改善でみられなくなった。また昨年度のてんかん学会で発作の前兆としてdreamy stateをもつものの内で、恐怖をともなったjamaïs vuを発作としてもつものが、déjà vuをもつものに較べて精神病状態を呈することが多いことを発表した。このようなことからTLEでは発作そのものと精神病状態の関連が示唆された。

以上の結果から考察をまじえてまとめてみると、IGEではてんかん頻度よりは前頭優位の棘徐波を含む徐波が精神病状態の発現に関連しているようであり、大脳機能の脆弱性が精神病状態を反映しているとみられた。その精神病状態は錯乱を主にし、注意機能の障害が中心になるようにみられた。一方、側頭葉てんかんでは、発作頻度と関連するようであり、それは外科治療で発作の消失とともに精神病状態もみられなくなったことから、側頭葉内側部の扁桃体、海馬の絶え間ない発作放電が精神病状態に関連しているようであった。精神病状態も慢性化した幻覚妄想状態を呈することが多く、その特徴は認知に対する情動の過剰とみなされ、このことから扁桃体の過剰な放電による強化された認知とそれによる妄想との関連が示唆された。このように、2つのタイプのてんかんでの精神症状は、その病因、病態を異にするものとみなされた。